

自分は自分で軸を持って自分を評価してつていうこ

とができたんじゃないかな

語り手 田中海登（高校四期生 本校教員） 聞き手 西田千穂子

学生時代

―高校に入學した時とか、教室に入った時にどんな気持ちでいたのか覚えていますか？

そうだな。当時は、今もすごく綺麗な校舎なんですけど、当時はもっと綺麗で。

―もっと綺麗だったんですか。

僕が四期生なので、できて四年目。机も木でできたオリジナルの机と椅子で、教室もすごいし、ホワイトボードもあったりとかして、最新の設備やって。そんな環境で勉強できるっていうのはすごくワクワクしました。

―すごい。今より全然違ったんですか。

そうですね。今となつてはみんなには当たり前に見えるだろうけど、当時は黒板が当たり前だったし、床は埃だらけで、そういった中学校から上がってきた僕からしたらすごく新鮮で。靴で上がっていいんだ。そもそもっていう。上履きとかもなかったし、それも全部新しくって、うわ、他の人と違う高校生活始まるみたいだな、そんなワクワクした気持ちがありました。

―高校に入った理由とか、選んだ理由はありますか？

理由はなんだったかな。実際、四期生は中学校から内部生がまだ上が

つてこない、全員高入生だけで構成される年だったんですね。だから、行けるぞ、入れるぞと思って、実際に受けてみたら通つて。普通に筆記試験を受けて入る形で、なんとか通つたっていう感じなんです。

―学校に入ったらやろうと思つたことはありませんか？

最終的にはソフトテニス部に入っただんですけど、当時はこんだけいい設備があるんだったら、なんでもできるなと思って。僕、中学校の頃からエレキギターとかをやつていて、で、バンドとかもやつたりとかはしたんですけど。だから軽音楽部を作りたいって思つて言つてみたら、担任の先生からダメだと言われて。

―えーそうなんですか。

なんでですかつて聞いても、ダメだとしか返つてこなくて。全然納得できなかったんですけど。やつぱり新しい部活を作るっていうことにはすごくハードルがあるんだと思つて。

―軽音は他のとこでやられたりとかしてましたか？（外部やイベント等）

最終的に、高校三年生の時にようやく、あすなる祭でライブをするってことができた。

―ライブしたんですね。どんな感じでしたか？

最近までは中庭に特設のステージを作つてやつてたと思うんですけど、そこは当時から設備があつて。その上に登つて、機材をレンタルしたものを、いいレンタルを使わせてもらつたりとかして。で、そこでやらせてもらいました。

―その時に思つたこととかありますか？

そうですね。なんだかんだで、すごく長いこと、ギターを弾いたりとかしてる割には、ステージに出たことがあんまりなかったので、緊張し

ました。で、その時、ソフトテニス部で声を出してたから、声がでかくて、それだけを武器にして、声上げたりとかして盛り上げようかなってやってました。

—いいですね。ライブとかも通して、文化祭という感じでしたか？
先生はどんな活動をしていましたか？

当時はやることが決まっていて、一年生は教室の中での出し物だし、二年生は、今では中学生が使っている、体育館を使って中舞台ぐらいの規模での劇、三年生だったら、今と同じような形で、市民ホールで劇をするっていう。そういう段階を踏めるのは好きで。

—そうなんですね。その中でも特にどの学年が印象に残っていますか？
高校二年生の時に、なかなか大変な年だったと担任の先生にも言われたりとかして。

—そうなんですか。

なかなか上手く進まなくて。プロ長さんがすごく頑張ってくれてたんだけど、一人で色んなことを手配するとか、これやってねって言うことは大変だから、時間がかかってたんだよね。劇の通しをするっていうのに。僕はその時もまだ部活動をやってて。で、夏休みに集まって、部活動を休んで行ってただけだけど、なかなか自分の番（劇の通し）が回ってこない。他の一緒にいた男子が、一旦外で休もうぜっていう風になって、それに誘われてついて行ったんですけども、教室のドアを閉める時に、すごい勢いで閉めてしまつて。それで、プロ長さんが、僕が怒って出て行ったんじゃないかと思つてしまつて。

—（笑）勘違いしてしまつたんですね。

そう。そこで泣き出しちゃつたんですね。教室の中で。あとで僕は気づいたんですけど、なんて謝つたらいいのかが僕もわかんなくて。その

プロ長の女の子とは、LIVE PROUD（滋賀県出身のロックバンド）のCDの貸し借りを経て、仲直りをしたんだけど。

—良かったですね。

そういうエピソードがあります。やつちまつたなつて思つてます。

—先生の、文化祭での役割は何でしたか？

高校二年生の時は、実は四人主役がいて、その中の一人だったんです。

—そうなんですね。メインだったんですね。

ディズニーの名目で、アニメの世界の王子様とお姫様と現実世界のお姫様と王子様が入れ替わるっていう。名前忘れちゃったな。で、当時今副校長の森園先生が担任で、綺麗だったジャケットを寄付してくれて。それを王子様になるために全部、白に塗つて。ズボンはズボンで真っ赤に染め上げて、王子様の衣装を自作するっていう。

—すごい。自作ならではのいい味が出るというか。いいですね。

—そうそう。パッキパキのジャケット着て（笑）暑くしょうがなかった。

—（笑）いいですね。文化祭のその衣装とか、保管されてたりするんですか？ まだありますか？

いや（笑）その時はさすがにもうパッキパキやつたんで捨てちゃいましたね。（笑）

—そうなんですか（笑）

でも確かにクラスTシャツとか団Tシャツとかは、当時のものをだいぶ長く持つてました。それこそ教員になるまでは持つてましたね。

—Tシャツはどんなデザインでしたか？

高校二年生の時なんかは、全部塗ってました。

―塗ってたんですね。

型を作って、全員がベタベタってローラーをして、白いペンキで塗って完成させてました。

―そうなんですか。(体育祭の写真を見て) 先生すごい楽しそうなんですけど、これはどのシーンですか？

これは一番最後に結果発表があつて、青団が総合優勝と、それから団アピールの最優秀賞をどっちも貰ったんじゃないかな。どっちかのタイミングで喜んでる写真だと思います。

―いい笑顔で楽しそうですね。体育祭で印象的だったことはありませんか？

自慢したいことがあつて。僕そんなに足速くなかったんですよ。当時は体力測定があつてから、種目とか決めて。で、体力測定の時、真面目に頑張っちゃったせいで、高校三年生の時にそここのタイムが出てしまつて。お前、中距離走れつて言われて。中距離走っていうのは、アイリスを二周するんです。(八〇〇メートル走)。それをやるつてなつて。足引つ張るのも怖いしなつて思つて。陸上部の女の子がいたので、走り方教えてくれと頼んで。そしたら、空いている時間を見つけてくれて、一緒に走ってもらつてアドバイスもらいながら結構練習したんですよ。本番は最初、陸上部が前を先導していたんですね。でも、自分は練習通りのペースを守つていて。だからこそ、後半からめっちゃ抜かせて、最終的に、陸上部の男子に僅差で勝つたつていうのがすごく嬉しかったです。

―陸上部の人ですか。すごい。練習の成果出てますね。少し違う話なんですけど、体育祭の後つて、中間テストがあると思うんですけど、どういう勉強してましたか？ 自分なりの勉強方法とありましたか？

休みの日なんかは電車乗らないといけないところではあるんですけど、友達の家まで行つて、テレビゲームしながら勉強もしたり。試験の前日になつたら、ひたすらワークをやるという感じでした。

―そうなんですね。どの教科に特に力入れてましたか？

やっぱ英語は好きだったので、普段は全然勉強してなかったんだけど、好きつて言つて、点数取れないつてすごく悔しいから(笑)、見栄を張るためにやつた部分はありました。

―そうだったんですね。得意教科は何でしたか？

中学から高校に入学するときは、色んな得意科目があつたんですけど、英語も好きだし、理科も数学も好きだしつていうのがあつたんですけど、結局、高校三年生になる時は文系になるつていう。高校一年生か二年生の時、一回自分の歳よりも低い点数を取つたことがあつて、定期試験で。そんな時はしばらく家に帰れなかったです。

―そうなんですか(笑)。その後、帰れましたか？

なんとか。その時たまたま、父親が車で家に帰つてきて、どうしたと聞いてくれて。言えない点数を取つてしまったと。で、次頑張れつて言われて、次は本当に八〇点くらい取れたんで、八〇点取つたのに、確かそんな時の成績は三でしたね。(笑)。十何点つていうのはやっぱり厳しいです。

―えー。そうなんですね。今と授業のカリキュラムはほとんど変わつていないですか？

だいぶ変わってますね。文理選択も高校三年生から始まつて。

―文理選択はどちらにしましたんですか？ 決め手はありますか？

当時、僕が入学したときは、立命館守山は理系を推して。スーパースサイエンスハイスクールというのを取つていて、進んだ理科とか理数

系の授業が受けられる。僕、理数系好きだったから、入学した時はここだと思ってきたんですけど、実際、高校一年生二年生になるにつれて。まずいな、僕文系だなんて思ってた。それこそ、数学のテストで自分の歳よりも低い点数を取った時点で、これは厳しいなと思いました。あとは、英語の先生を視野に入れないなと思っていて。となると、英語の先生の免許を取るには、文系に行かないとその学部でしか英語の先生になれないっていうのもあって、英語に興味もあつたし。だから、文系かなと思って選びました。

*

将来について考える

—そうなんですね。英語の先生になると考え始めた時はいつですか？

元々、両親が小学校の先生をしていて、先生になりたいなとは思っていて。年を経るにつれて、色々な選択肢が増えてきて、その中で、子供に何かを教えるのも好きだけど、特に英語好きだなと思って。自分の好きなことで教えたくて、英語の先生を視野に入れました。

—英語のどんな部分が好きですか？

当時は電子辞書を使って単語を調べてというのが主流で、当然、しゃべれないと輪が広がらない。そんな考えが僕の中にあつたりして。実際、英語の先生だなんて思ったのは、高校三年生の夏休みに海外研修があつたんですよ。二週間カナダに行ったんですけど、実際話してみると中学生以下の英語しか喋れなくて。悔しいなと思ったんですね。でも、なんとか簡単な英文でも話せば、この人が何をしたいか、何を考えているのかっていうことが分かる。でも、本当に何も分からなかつたら、この人と喋ることって一切ないんだろうなと思うと、英語が喋れるか喋れないかで、世界の広がり方ってこんなに変わるんだと思ったりしました。

で、たまたま休日に、当時の担任の先生が英語の先生だったんですけど、スーパーマーケットで僕がホストファミリーと一緒にいる時に、その先生に出会って、当時は何を言っているか分からなかつたので、その先生がホストファミリーと英語で話しているのを見てかつこいいなと思って。というところで、英語の先生ってすごいんだっていう、憧れもあつて。

—いいですね。海外研修を経て、その後、自分の将来について考えることとか、変化はありましたか？

当時は英語を使って何かをしたいなと思っていて、国際経営学部か、英語の先生になれる文学部の国際コミュニケーションで迷っていて。当時担任の英語の先生に相談も乗ってもらったんだけど、僕が考えている通り、先生になりたいなら国際コミュニケーションだし、会社で勤めて英語を使いたいんだったら国際経営だしっていうところで、どちらも応援するよと言ってくれていて。僕はその先生（担任の先生）がかつこいいなと思って、最終的には文学部の国際コミュニケーションに行つて、教員を目指した。というところです。

*

高校時代の学び―教員

—教員になって、教員として、生徒への伝え方とか何か工夫している点がありますか？ 英語の授業でも、そのほかのことでも。

教員になった当時とは異なっていて。当時は、高校生で自分のように悔しかった思いをしないように、使えるような英語を教えていたんですけど、今はシフトしてきていて、高校生の時にできるようになることも大事だけど、必ずしもそうでなくていいと思っていて。少なくとも、勉強の仕方を教えられたいいなと思って。実際、僕も大学行つてから、

英語やりたいけど何やったらいいかわからないってなって。今、大人の人ってそういう人多くて。それってもったいないなと思って。大学生、社会人になってからとか、学び続けるにあたって、どういう勉強方法が良かったかなっていうことを身につけてくれたら、高校で英語喋れなかったってなっても、後々に生きてくる時があるんじゃないかなと思って。

―勉強方法で先生がいいなと思う方法ってどんな感じですか？

一番いいのはやっぱり使ってみることですよ。だからこそ、留学っていうのは大きいなと思って。誰かと次喋る時にこのフレーズ使ってみたりとかをすぐに試せるって大きいなと思って。でもその環境って、今だったら、その環境を擬似的に作れるかなと思ってます。

AIとかもあるから、実際にこれであってるかどうかチェックしてとかもできるわけだし。それは羨ましいなと思いますね。当時はあってるかどうかを直接聞かないといけないし。だから、使えるツールは使って、実際に英語を自分で使ってみる。そこからフィードバックを得るということとは大事だなと。

―そうですね。先生になる時に、目指している理想みたいなものはありましたか？

生徒に寄り添う先生ではありたいなと思ってましたね。気持ちだけでも生徒と同じ目線に立ちたいなと思ってましたね。

―そうなんですね。いいですね。その教師になったと後と生徒の時とで、学校へのイメージは変わりましたか？

高校生の頃は、全員が高入生なので、各々が培ってきた中学校の知識を持ってきて、全員、異文化間で過ごしてるみたいな感じで。で、先生なりたてでこちらに戻ってきた時は、中学校から入ってくる子たちも半

数はいて、立守ってこういう場所だよねっていう当たり前がある中に高入生が混じっていく。そういうものだったので、すごくいい子たちだなと思いました。素直だし。僕らも素直だったけど、当たり前が違うから（中学校が全員違うから）。当時と比べたら、より規律があるなと思いました。

―そうなんですね（笑）。急に話が変わってしまうんですけど、ずっと触れていなかった部活について。ソフトテニス部に入られてたと思うんですけど、なぜ入ったのかを聞きたいです。

僕小学校からクラブでソフトテニスをやっていて、中学校もそのまま入って。で、ここに入学する時もソフトテニス部あるなと思ってたんです。でも硬式もあるからどうしようかなと思ってたりとかで、あとは軽音学部も作ってたし。結局、軽音学部がダメだった。で、当時は、硬式テニス部がすごく多くて、もう入ったら人数を絞るためにひたすら校内を外周回られる。（走られる）。それは嫌だなと思って、ソフトテニス部にしたんですけど。ソフトテニス部もなかなか厳しい。すごく頑張っている部活で。で、当時は今でいうスポーツ推薦はないんですけども、色んな頑張っている生徒さんを集めているところだって、なかなかえらいところに来てしまったと思っただけです。当時は、部活動に入らないっていう選択肢はなくて、全員部活動に入らないといけないっていう、ルールもあったんです。入るんだったらソフトテニスだねっていうことで入りましたね。

―練習もハードでしたか？

ハードでした。なかなか暑かったんで、屋根もなくて、遮るものも周りに何も無いという。先輩もガッツリやってきている人たちばかりなのでなかなか厳しい部分はあったりとかするし。

―顧問の先生とかコーチとの関わりの中で、覚えていることはありますか？

当時の顧問の先生はテニスのことだけじゃなくて、普段の生活であったりとか、人間性の部分について色んな話をしてくれる先生で。僕、その部活のキャプテンをしていることがあったんですけど、キャプテンはもちろんだし、そうでない人も、もっと周りを見れるようになるべきだっていうことで。どうしても部活動中で自分が作業をしている時って、視野が狭くなったりとかしてしまつて。何か他のことに気を配れるかというところではない。次のこと、次のことを全然考えなかったりもして、そこを指摘してもらったりですね。その先を見るとか周りを見ることが、その上で自分で考えて判断をするっていうことはすごく大切だなんて教わつて。で、そこは高校時代の中で、全然完璧にならなかったんだけれども、なんなら大学生になってもまだまだ未熟な部分はあったんだけども、そういう失敗をするたびに、その顧問の先生の言葉というか、教えはすごく響いてますね。

―そうなんですね。すごいいいですね。お世話になった先生の中に、横江川先生の名前があったんですが、どういう関わりをしましたか？

さっき言っていた顧問の先生の言葉っていうのが、いわゆる横江川先生の言葉で。それで、テニスのことはもちろんだけれども、人としてというか。社会人になるにつれて必要なことはなんだっていうことは教えてもらったなと思つていて。そこで、自分に足りない部分はなんだっていうことを教えてくれたなと思つてます。

―いいですね。お話ありがとうございます。最後の質問になるんですが、先生が高校の過程を踏まえた上で、自分の一番好きなところってこれだみたいなものはありますか？

自分の好きなところなんだろう。でも自分は好きです（笑）。多分、無条件で自分を好きでいられるところが好きです（笑）。自分好きですか？

―たまに嫌いなんですけど、何かを成し遂げたとき、今の自分良かったなつて思える時はあります。先生はそういう時ありますか？

私もあります。授業とかで、メインで担当する部分の資料がバチっと仕上がったら、素晴らしいなと思つたり（笑）

―そうですよね（笑）

でも、それで仮にうまくいかなかったとしても、あんまり自分を嫌いにならないですね。

―そのマインドはずっとですか？

ずっとかな。でも、大学卒業してから社会人として教員になるまでのところで、不安定だったりとかしたので、仕事決まるのかみたいな。それでも自分嫌いにはならなかったからな。あんまり、一〇〇点満点をつけてないからかもしれないですね。自分嫌いになる時って、自分が好きになれる基準があつて、それが高すぎて、それに追いついていない自分に対して、ダメだなと思うのが大きいんじゃないかと思つていて。僕、その合格基準がすごく低かったりするんですね。だから、基本的にそれを上回るように設定しているの。自分ってこんなもんだなっていう。それを上回れたらいいじゃんてなるんじゃないかな。

―立命館守山でやってきたことも、そのマインドに影響してたりするんですか？

影響してるんじゃないかな。少なからず。やっぱり、色んな人がいるので、当然すごく尖っている人もいるし、一定の分野ですごい成果を出す人もいるし。得意、不得意はあるわけで。つてなると、単純に比較は

できないよねって思えるようになったのは、この立命館守山のおかげであって。じゃあ単純に比較できないから、一旦もう自分は自分で軸を持つて自分を評価してつていうことができたんじゃないかって、今聞かれています。

—すごい。そのマインドがすごいなと思いますし、尊敬します。これで質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【感想】

語り手のお話を聞いて、高校時代の経験がその後の考え方や生き方にも大きくつながっていることが伝わってきた。部活動や文化祭で仲間や先生と関わりながら多くのことを学び、英語学習や海外研修などを通して将来について考えた経験など、高校生活のさまざまな体験が語り手の考え方や行動の軸を形作ったのだと感じた。またそのような経験を土台として教員としての今につながっていることにも深く共感した。私も高校での経験や学びを大切にしながら、語り手のように自分の軸を持ち、成長していきたいと思った。



左：語り手 田中海登さん
右：聞き手 西田千穂子